

鹿踊りの起源をめぐる伝説について —宮沢賢治を超えて—

井 上 孝 夫

千葉大学・教育学部

An Inquiry into the Legends of “Shishiodori” (Dancing of “Shishi”)
: Beyond Kenji MIYAZAWA

Takao INOUE
Chiba University, Faculty of Education

東北地方を中心に行なわれている民俗芸能・鹿踊り（ないしは、獅子踊り）の起源については、これまでいくつかの説が唱えられてきた。そのなかで、マタギ起源説はマタギ集落と伝承地が一致しないため、説得力に乏しい。世上流布しているのは人間による鹿の模倣説で、宮沢賢治の「鹿踊りのはじまり」に依拠して語られることが多い。これに対して、本稿は鹿踊りは製鉄の民俗の一種であることを主張する。そして畠山重忠と日蓮の関連性から、宮沢賢治説の表層性（あるいは、非土俗性）と限界性を指摘する。

キーワード：製鉄の民俗 (Folklore of Iron Manufacture), 畠山重忠 (Shigetada HATAKEYAMA), 日蓮 (NICHIREN), 宮沢賢治 (Kenji Miyazawa)

〔目次〕

- 第1節 はじめに
- 第2節 宮沢賢治「鹿踊りのはじまり」について
- 第3節 鹿と人間のかかわり
- 第4節 宮沢賢治と日蓮宗
- 第5節 日蓮と畠山重忠
- 第6節 結語
- 〈文献〉
- 〈付記〉

情はかなりあやふやなのである。

獅子踊りは岩手県では鹿踊りであり、民俗芸能として広く知られている。わたしも1970年代の半ば頃、花巻温泉の一角で鹿踊りを見たことがあり、その時、宮沢賢治の作品と関連づけた解説を聞いたような覚えがあった。以来、特に気に止めることもなかったのだが、嶋氏の文章に接して、遠い記憶が蘇り、改めて鹿踊りの起源について少し考えてみようと思ったのである。

第1節 はじめに

鹿踊り（あるいは、獅子踊り）は、シシの頭を付けて踊る民俗芸能である。その起源については、これまでいくつかの説が唱えられてきた。

マタギとのかかわりを指摘する起源説もその一つであるが、『白神山地通信』25号（2002年4月30日発行）のなかで、嶋祐三氏は青森県鰺ヶ沢町目内崎に伝わる津軽獅子踊りに言及し、その発祥をマタギに求める従来の説に対して、「津軽獅子踊りが、大然や一ツ森などマタギの里ではなく、目内崎に伝わるのはどうしてだろうか」（嶋「いくつもの沢・赤石川・流域のムラ・赤石海岸」2002年、39頁）と疑問を提起している。木村弦三（『続・奥々民俗旋律集成』1977年）によると、津軽獅子踊りで用いられる頭は熊と鹿の二種類にわかれているが、元来、マタギの獲物の中心は鹿であったため、獅子踊りは鹿頭に一定していた、という。つまり、津軽獅子踊りの原像は鹿踊りであり、それはマタギが鹿を捕獲した際に、猟場に神を勧請して間断なく踊り狂ったことに由来する、というのである。そうだとすれば、獅子踊りはマタギ集落と当然継承されているはずなのだが、そのあたりの事

第2節 宮沢賢治「鹿踊りのはじまり」について

花巻温泉で聞いた宮沢賢治の作品というのは、「鹿踊りのはじまり」であった。それは『注文の多い料理店』のなかに収められていて、次のような文章で始まっている。

「そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあいだから、夕陽は赤くななめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のようにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いていた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行なわれていた鹿踊りのほんとうの精神を語りました。」

ここにあるように「鹿踊りのはじまり」のなかでは、「すすきとおった秋の風」が鹿踊りの精神を語る、という筋立てになっている。

——嘉十という農民が栗の木から落ちて膝を悪くしてしまう。嘉十は山の湯に行って療養しようとするのだが、その途中の芝原で休憩がてら団子を食べる。そして余った団子を「鹿にくれてやろう」と少し残して、また出発する。嘉十はしばらくすすむが手拭いを忘れてきたことに気づいた。先ほど休んだ場所に戻ってみると、もうそ

こには鹿の気配がしていた。嘉十は気づかれないようにのぞいてみると、鹿たちが環になって踊っている。そして嘉十には鹿の言葉が聞こえてくる――

ここにあるのは、全く夢のような話である。「ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおりに書いてみました」(『注文の多い料理店』「序」)。

こんなことをいってしまうと身も蓋もないが、宮沢賢治は鹿踊りの起源について、ただ自分が思ったことを書いているだけなのである。そして結論は単純明快だ。人間が演じる鹿踊りとは、鹿が踊る様子をまねしたものである。だが、それでいいのか。

この点に関して、例えば、吉田司は、「賢治は各地で己れを取り囲む苦々しい農民や町民の〈現実〉に仮想爆弾を仕掛けては、陽気に爆破して回った。なにしろ〈仮想〉だから、誰にも実害はない。ひとり賢治が気宇壮大になるだけで、例えば『鹿踊りのはじまり』なんてイーハトーブの童話は、よく読めば農民または山の民の古びた伝承の換骨奪胎というか、それからの泥棒で出来上がった物語であることがわかってくる」(『宮沢賢治殺人事件』2002年、198頁)という。要するに、宮沢賢治の文章は、現実と何らの接点ももたない観念的なものだった、というのである。

確かに、そのとおりのものである。だから、鹿踊りをよく知る人たちからは、賢治の文章は相手にもされなかったのだろう。ところが時代が変わり、人が変わると、もうやみくもに、鹿踊りは宮沢賢治とともに語られ、花巻温泉の観光名物にされてしまうのである。そこにあるのは、もはや鹿踊りの「成れの果て」のようなものでしかない、といえないだろうか。

第3節 鹿と人間のかかわり

鹿踊りの起源については実は、「農民または山の民の古びた伝承」のうちに語られていた。ただしそれは、宮沢賢治が「換骨奪胎」したものとは全く異なるものだったはずである。

その一つの代表例を挙げてみよう。岩手県田野畑村菅窪(すげのくぼ)に伝わる鹿踊りについて、地元の伝承では、義経追討を命じられた畠山重忠が田野畑村大芦に上陸して伝えたものが原型だとされている。重忠はこの大芦の地に畠山神社を建立し、守護神「鉾形八幡大明神」を勧請するとともに、鹿踊りを伝えたというのである。そしてその数百年のちの嘉永5年(1852年)、大芦の一番の踊り手であった大工・常五郎という人物が菅窪に移住し、そこで菅窪鹿踊りを創始したとされる。常五郎一族は代々、この地の雷神神社の別当を務め、踊りはこの神社に奉納されるようになった。これが、今日の菅窪鹿踊りの成り立ちの経緯だという。

重忠がこの地に本当にやって来たのかは疑わしいところだが、重忠ゆかりの人々がこの地に移住して鹿踊りを伝えたということはあり得る話である。そのうえ、この

田野畑村では佐々木姓に次いで畠山姓が多く、伝承されている鹿踊りでは「最初に出てくる踊り手が畠山家紋五三の桐の大きな紋をつけた袴をはき、鹿の形をしたかぶり物を頭上にして、次が佐々木の家紋、或は笹りんどう(源氏)の袴をつけた踊り手等が出て来る」のだというから、鹿踊りと畠山氏とのかかわりはかなり濃厚なものとみてよいだろう(清水寿『鑄師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』1994年、107-110頁)。

では、重忠ゆかりの人たちはなぜこの地にやって来たのか。「義経追討」というのは、もっともらしい分だけ、かえって伝説の域を超え出るものではないように感じられる。実は重忠は鍛冶師および石屋の統領だったといわれていて、それにゆかりの一族も当然鍛冶にかかわっているとされる。田野畑村の畠山神社の御神体が鉾形ないし鍛冶神・天太麻羅を表す男根であったり、鍛冶師が信仰するスズメの絵馬が奉納されていることからしても、鍛冶とのかかわりがうかがわれるところである。この畠山神社は鉾を御神体とするところから鉾形(桑形)神社とも呼ばれているのだが、ここには次のような伝説も残されている。

「ある働き者ぞろいの農家があつて、いつも家内じゅう、そろって畑に出て稼いでいた。家には嫁一人だけ残って炊事をし、昼飯ときには決して畑に知らせに来ていた。ある日のこと、昼になっても嫁が来ないので、どうしたものかと、一同が帰ってみると、なんと嫁は味噌桶と一緒に、大蛇に巻きつけられていた。驚いたみなは、畑からもって帰ってきた鉾で大蛇の腹を打って殺したが、嫁は生きかえらなかつた。大蛇を打った鉾を祀り、建立したのが鉾形神社だという」(金野静一・須智徳平編『岩手の伝説』1980年、113頁)。

一言でいうと、蛇が嫁を殺し、その蛇を鉾で打つ、といった趣旨の伝説であり、本来語られるべき事柄が一部省略されている感もあるが、蛇と鉾をキーワードと考えれば、その背後に製鉄伝承が語られているとみることができる。すなわち、この伝説は、「蛇」に象徴される先住の製鉄民が「鉾」に象徴される後発の製鉄民に征服される図式を示しているのである。このようなことから推測して、畠山重忠ゆかりの鍛冶師がこの地にやって来たと考えてよいのではないだろうか。

では、鍛冶師と鹿踊りとの関係は何か。一見両者は何の関係もなさそうである。ところが、鉄をつくるときに使うフイゴ(送風器)には鹿の皮が用いられていたのだった。ここから、鹿踊りというのは鍛冶師がその鹿を供養するために始めた、というもう一つの鹿踊り起源説が登場することになる。

鹿踊りが人間と鹿との一つの関係性から生まれたものだとするならば、その根底にあった具体的なかかわりはやはり、鹿の皮をフイゴの素材に使っていたことに求めなければならないだろう。この点は、文献のうえでも確かめることができる。すでに『日本書紀』『神代上』には「真名鹿の皮を全剥ぎにしてフイゴ(天羽輪)をつくった」という趣旨の記載があり、古代から鹿は製鉄とかわっていたのだった(窪田蔵郎『増補改訂 鉄の民俗史』1991年、には、皮フイゴについての具体的な記載の一つとして岩手県大槌町の小林家に伝わる「製鉄絵巻」

が挙げられている)。

このように、鹿踊りの起源については「鹿を供養する」製鉄者の古くからの伝承と信仰があったことがうかがえるのである。

第4節 宮沢賢治と日蓮宗

ここで改めて、宮沢賢治の鹿踊り起源説に戻ることにはしたい。宮沢賢治の「鹿踊りのはじまり」には、製鉄のことなどは念頭にないようである。しかし宮沢賢治と鍛冶師の統領・畠山重忠とのあいだには、両者を結びつける一つの経路が開かれていた。それは鎌倉時代の僧侶・日蓮を媒介項としているのだが、賢治自身はそのことに気づくことはなかった。

その理由の一つは、賢治の上滑り的な姿勢に起因する。それはつまり、自分自身を農民の立場におきながらも農民の土俗的な文化へとは向かわないという点であり、また父親の仕事(古着商兼質屋)と宗教(浄土真宗)への反発から法華経や日蓮宗に共感、心酔してしまうという安易さでもある。もし宮沢賢治のうちに「現代性」があるとしたら、それは(商人)資本主義への拒絶的な姿勢と、その安直な裏返しとしての、農民への(表面的な)共感姿勢ということになるだろう。賢治の場合、その帰結が日蓮宗への帰依となったのだが、日蓮その人に深入りすることはなかったのである。つまり、「賢治が出会ったのは古びた鎌倉時代の日蓮ではない。大正時代に呼び出された日蓮で、ピカピカの銃剣や大砲や軍艦で武装している」(『宮沢賢治殺人事件』129頁)といわれるように、賢治は国柱会の創設者・田中智学(1861—1939年)の「近代日蓮主義」に共感したのだった。国柱会というのはもちろん、「我日本の柱とならむ」という日蓮の言葉に由来しているのだろうが、日蓮の思想とは大きな違いがあった。「日蓮のいわゆる『日本の柱』の意味は、国柱会の国柱のそれとはたいへん異なる。日蓮における日本の概念には、国家のほかに国土、国民、その他環境一般の意味もふくんでいたのに、国柱会というばあいの国とは、天皇制国家あるいは国体——国民体操の略ではない。日本国家の本体たる天皇統治の国家体制のこと——の意味にとどまっていて、主権在民の国家体制などまったく予想もされていなかった」(所頃重基『近代社会と日蓮主義』1972年、114頁)。そうであるからこそ、「ファシズムの台頭とともに、多数の軍人、右翼指導者、宗教家が国柱会に集まるようになったのである(村上重良『日本宗教事典』1988年、400—402頁)。賢治は1920年に国柱会に入会し、妹トシの見舞いのため東京に来た折には田中智学の講演を聞き、1933年に亡くなるまで、その信仰を貫いた。

賢治の日蓮宗、国柱会への共感とは「国家、社会、宇宙の救済」という一種の解放思想のごときものと結びついている。一見したところではそれは格好よくみえるが、ここでも、その格好よさが現実生活に生活している人間からの遊離と引き換えになっていることをみないわけにはいかないだろう。結局、それは全体主義と戦争を裏から支える役割を演じることになったわけだが、賢治自身はその帰結をみることなく亡くなった。もし賢治があと10

年、20年と生きていたならば、その思想は大きく変貌していたに違いないし、現在残されている作品に対する世間の評価も全く変わっていただろう。

だがここでは日蓮についてのみ取り上げる。日蓮が生まれた安房国、そして最初に修行した清澄山とは一体何であったのか。この点について、わたしはかつて次のように問題提起していた。

「清澄山の最高峰は妙見山(383m)と呼ばれ、日蓮ともかわりの深い山中の名刹清澄寺の本尊は虚空蔵菩薩である。妙見は北極星、虚空蔵は金星であって、いずれも星神の信仰にかかわっている。それと同時に、これらの神々の信奉者は製鉄集団でもあり、清澄山もまた房総の他の山々と同様に製鉄に関係の深い山だということが示唆されている」(井上「房総地域の山岳宗教に関する基礎的考察」1994年、206頁)。

これを書いた当時、日蓮と製鉄に関してはただ「傍証」をもっていただけでなかった。またその後も、日蓮と妙見信仰とのかかわりについて、次のような指摘があるにとどまっていた。

例えば、「[妙見神は]鎌倉時代には日蓮宗を守る神として、日蓮宗寺院では各地で祭られている」(塚越正佳『小川町史跡めぐり』1992年、24頁)というもの。確かに妙見と日蓮宗とはかわるのだが、それが何に基づいているのかはこの指摘のなかでは依然として不明である。また、「清澄山における妙見信仰は、星を同根とする所から、日蓮において創唱されたとも考えられる」(佐野賢治『虚空蔵菩薩信仰の研究』1996年、261頁)ともいわれる。だが清澄寺の縁起をみれば、日蓮以前に妙見信仰があったことは自明のことであるから、これもいい過ぎというよりほかはない。

第5節 日蓮と畠山重忠

このような研究状況のなかで、日蓮の出自にかかわる次のような指摘は決定的に重要な意味をもっている。日蓮の出自に関してはいくつかの説があるのだが、一般には、安房小湊の漁師・貫名重忠と梅菊とのあいだの子とされている。ところが勝浦市法花(ほうげ)の妙法華山竜蔵寺が秘蔵してきた「高祖御繼図」によると、畠山重忠と菊の前のあいだの息女で、父母の没後、畠山三郎の養女となった菊姫が千葉胤綱の取り次ぎで貫名重忠に嫁入りして生まれたのが日蓮だというのである(ちなみに、竜蔵寺はここで日蓮が説法したとき、八大竜王が出現したといわれている寺院である。藤沢衛彦編『日本伝説叢書 上総の巻』1917年、52頁)。つまり、日蓮は畠山重忠の孫にあたるというわけである(大久保雅行「日蓮誕生論」1999年。なお、この論文より溯ること10年ほど前に、川本町在住の清水寿氏は埼玉県嵐山町歴史資料館において同様の趣旨の講演をしているということである)。

そのようにいわれてみると、妙見と日蓮との関連もはっきりとしてくる。畠山重忠は平良文の血統を引く妙見信仰の担い手であるとともに、鉄などの金属を掌握していた豪族であった(井上「畠山重忠と鉄の伝説」2000年)。日蓮がその孫であるということは当然、妙見信仰を受け継いでいたと考えられるだろう。また日蓮の周辺

に、妙見信仰の担い手たちが数多く存在していたことも推測できる。このことは、清澄山の周辺にも日蓮以前にそのような一族が活動していたことを意味している。つまり日蓮以前から、清澄山は妙見信仰の舞台だったということなのである。このように考えると、「[妙見神] 鎌倉時代には日蓮宗を守る神として、日蓮宗寺院では各地で祭られている」という先の指摘もすんなりと理解できるのではないだろうか。すなわち、「日蓮の背後に妙見あり」、「日蓮宗は妙見信仰によって支えられ発展した」ということである。これを裏づけるかのように、次のような指摘もある。

「[日蓮が] 12才で清澄山に登り虚空蔵堂(妙見堂)に籠もったその時の名が薬王丸、鎌倉王権や他宗から圧迫されしばしば危険におちいつているが、彼を救ったのは白猿にたとえられる産鉄民であった。」「日蓮宗の宗紋は井桁のなかの橘。橘は金属を意味する」(前島長盛『古代の風』2000年、350頁)。

さらに、千葉県長柄町に伝わる日蓮の伝説は、興味深いものがある。

「昔、日蓮が今の長生郡長柄町のあたりを通りかかった時、折から田植えをしていた早乙女が、足にくっついた蛭に血を吸われて困っていました。そのとき日蓮は、早乙女がつかまえた蛭に呪いをかけて石にしてみました。そして早乙女に、『この石を一番上の田に持って行き、捨ててきなさい。』といいました。その後、この田の蛭の子は生まれましたが、血を吸うことはなくなり、これは虫菌の薬になったといわれています。」

「同じ長柄町の鵠谷にある清水井戸は、日蓮が杖を突いたところ水が出るようになったもので、眼病に効くといえます。同じような話は長柄山にもあります。」

「この町の立鳥という所にある汲井谷の井戸は、その昔、弘法大師が掘ったと伝えられていますが、日蓮が房州から笠森の観音へ向う途中、この井戸で21日間の水ごりをとって身を清めたといい、今でもこの井戸は、どんな日照りでも水が涸れないといわれています。この井戸の水も打ち身や歯の病氣などに効くといって、遠くからもらいに来たそうです。」

「また、長柄山での日蓮の話として、老婆が里芋を食べているのをみて、『分けてほしい。』という、『石芋だから食えない。』といってあげなかったら、老婆の芋は後で本当に石芋になってしまったといわれています」

(以上、平野馨『伝承を考える』Ⅱ、1986年、110-111頁、より、段落ごとに区切って引用)。

以上のような「長柄の日蓮」伝説について、平野馨は「鵠谷や立鳥などの話は一般的には弘法大師伝説とされる内容であり、これとかかわっているのが印象的で、真言密教から日蓮宗への布教の道程が暗示されています」

(平野『伝承を考える』Ⅱ、111頁)という。確かに、全国各地には湧水にかかわって「弘法の井戸」などと弘法大師との関連を示す伝説が数々残されている。その点で、長柄の伝説は当初、弘法大師とかかわって伝えられていたものが、のちに日蓮に変わったとみることもでき、その変化を真言密教から日蓮宗への布教過程の変化を示している、と解釈することもできるだろう。また、最後の石芋の伝説は一般的には、「乞食坊主」が村人に芋を

乞う、という話なのだが、この「乞食坊主」があとから実は弘法大師だったとされる場合もある。その点では、清水や井戸の伝説と同様に、布教の変遷過程を示唆していると解釈することも可能だろう。だが、長柄の日蓮伝説は布教の変遷にとどまらない含みをもっているようにも思われるのである。それはこの地が畠山重忠の伝説が残る土地柄であり、金属生産とも深いかわりがあるからである。

まず金属についていえば、この地域は中世房総における鑄物師の発祥の地として広く知られている。この地を拠点にして梵鐘などを製造していたのは、広階や大中臣といった姓をもつ鑄物師であり、彼らは鎌倉の大仏を鑄造するために、河内国から相模に移住し、そののち上総のこの一帯に移ったとされる。広階氏は長柄町針谷郷、大中臣氏は長柄町刑部郷に移住した。彼らがなぜ上総のこの地を選んだのか、という点に関して、市村高男は、砂鉄や木炭が入手しやすかったこと、胎蔵寺、飯尾寺、笠森寺などの巨刹が点在する東上総仏教の中心地であったこと、上総国府とも近接していることを挙げている(市村「中世房総における鑄物師の存在形態」1991年、340頁)。その通りの指摘ではあるが、基本は砂鉄、木炭の入手ということだろう。そしてそこに仏教系寺院が建立されたと考えるべきである。例えば、胎蔵寺の場合についてみてみよう。この寺は現在は眼蔵寺と名称を変更しているが、江戸時代の宝永年間(1704—10年)までは胎蔵寺であった。その名称はもちろん、真言密教のいう金剛界、胎蔵界というときの胎蔵界に由来している。その胎蔵寺の縁起によると、千葉秀胤が長和2年(1013年)に神夢によってここで金を掘り当て(それゆえに、このあたりを金堀山という)、この地に寺院を建立したのがこの寺の始まりだという(この点については併せて、柴田弘武「常総の風土と古代製鉄」1998年、を参照)。そしてこの寺の梵鐘は、「弘長4年(1264年)・広階重永」の銘をもつ、房総のなかでも最も古い梵鐘の一つなのである。千葉秀胤云々というのは伝説の域を出ないものなのかもしれないが、胎蔵寺の成立にまつわる以上のような経緯は、金属と寺院とのかかわりを明確に示しているように思えるのである。

次は、畠山重忠にまつわる伝説である。重忠は当地金谷郷の畑山谷の小丘のうえに居住していたといい、鵠谷村境の山頂に城を築いていたともいう。そして金谷には重忠の子孫・石井家がいまも存続し、その伝承を伝えている(石井家には江戸時代に描かれた重忠の画像が残されている)。なぜこの地が重忠とかかわるのか、という点については、先にも述べたように、重忠と製鉄のかかわりを踏まえておかなければならない。重忠は関東を中心にして、金属関係者を束ねる親方(統領)のような存在だったのである。それゆえに、鎌倉の大仏の鑄造にかかわった相模国の鑄物師とも当然つながりがあったとみることができる。そのうえ、重忠の本拠地、武蔵国畠山に近接して塚田鑄物師が活動し、その活動は「明徳3年(1392年)・道禅(塚田鑄物師の一人)」の銘をもつ清澄寺の梵鐘の鑄造にまで及んでいる。これは、重忠の系譜を引く鑄物師が房総の地や日蓮宗とも密接にかかわっていたことを示すものである。

以上のように、日蓮が畠山重忠の血筋を受け継ぐ妙見信仰を担う産鉄民から生まれ、日蓮宗が妙見信仰とも密接につながっていたことは明白である。そして畠山重忠の影響は東北地方北部にまで及び、鹿踊りを伝えた本人と伝承されている。ところが、これらのことに宮沢賢治が気づくことはなかった。岩手県出身で、日蓮宗を信仰し、鹿踊りについて語っているのに、である。

第6節 結語

一般に、「鹿（獅子）踊り」といわれているものには、そのかぶり物の違いから、鹿系統のものと熊系統のものがあるといわれている。宮沢賢治の「鹿踊り」の話は当然鹿系統のものであり、田野畑村の鹿踊りも鹿系統である。『白神山地通信』25号で嶋祐三氏が言及している「目内崎」の獅子踊りはどちらの系統なのだろうか。

「赤石村久田」の鹿踊りは鹿系統と考えられ、「鹿の背の斑点は28宿の星に因み、山伏達が山中にて鹿を見ることは大吉祥と崇拝することを忘れなかった」というのだから、その背後に星神（つまり妙見）への信仰を引き継いでいるようで大変興味深いものがある。また菅江真澄の『鄙の一曲』のなかの「かねほりたたらふみがうたふも、剣舞」という一節にも興味をそそられる。

津軽地域ではさらに、深浦町横磯集落に鹿系統の獅子舞が伝えられているが、横磯、大潤、小福浦の各集落の産土神が金山彦（深山神社の祭神）だというのも、製鉄と鹿踊りとの関連を示唆しているようで関心を引く。

ただ、「鹿（獅子）」というのは獣全般を指すということで、かぶり物が鹿でも熊でも本質的な差異はない、とする考え方には疑問を感じる。特に、製鉄の民俗において、「日本の文献で『鹿』が出てきたら『採鉱、冶金』を考えよ」（近江雅和『記紀解体』1993年、238頁）といわれるくらいなのだから、鹿と熊の違いに意味を見出しおくべきだろう。

ということで、鹿系統の鹿踊りはその起源において製鉄とのかかわりが考えられる、ということを確認しておきたいのである。

〈文献〉

藤沢衛彦編、1917、『日本伝説叢書 上総の巻』日本伝説叢書刊行会。

平野馨、1986、『伝承を考える』Ⅱ、うらべ書房。

市村高男、1991、「中世房総における鋳物師の存在形態」中世房総史研究会『中世房総の権力と社会』高科書店：328-391頁。

井上孝夫、1994、「房総地域の山岳宗教に関する基礎的考察」『千葉大学教育学部研究紀要』42巻(I)：197-211頁。

井上孝夫、2000、「畠山重忠と鉄の伝説」『千葉大学教育学部研究紀要』48巻(II)：9-19頁。

木村弦三、1977、『続・奥々民俗旋律集成』木村弦三著作集刊行会。

金野静一・須智徳平編、1980、『岩手の伝説』角川書店。

窪田蔵郎、1991、『増補改訂 鉄の民俗史』雄山閣。

前島長盛、2000、『古代の風』日本学術文化社。

森山一、1978、『宮沢賢治の詩と宗教』真世界社。

村上重良、1988、『日本宗教事典』講談社学術文庫。

小倉豊文、1952=1978、『雨ニモマケズ手帳新考』東京創元社。

大久保雅行、1999、「日蓮誕生論」高木豊・小松邦彰編『鎌倉仏教の様相』吉川弘文館：282-322頁。

近江雅和、1993、『記紀解体』彩流社。

佐野賢治、1996、『虚空蔵菩薩信仰の研究』吉川弘文館。

柴田弘武、1998、「常総の風土と古代製鉄」谷川健一編『金属と地名』三一書房：272-285頁。

嶋祐三、2002、「いくつもの沢・赤石川・流域のムラ・赤石海岸」『白神山地通信』25：32-39頁。

清水寿、1994、『鋳師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』。

所頃重基、1972、『近代社会と日蓮主義』評論社。

塚越正佳、1992、『小川町史跡めぐり』埼玉県小川町役場。

吉田司、2002、『宮沢賢治殺人事件』文春文庫。

〈付記〉

本稿は、「鹿踊りの起源について」と題して、『白神山地通信』27号（2003年3月20日発行）および、28号（2003年9月20日発行）に掲載した小論がもとになっている。ただし、今回の再録にあたっては、全体にわたって加筆修正を行なった。初出の機会を与えてくださった『白神山地通信』編集者・嶋祐三氏に深く感謝したい。